田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト２０２３
“ふしぎ文学の達人”が選んだ　「再生」オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

1.『フランケンシュタイン』
メアリー・シェリー／著　芹澤恵／訳
新潮文庫　2015

◆まあ、「再生」といえば「フランケンシュタイン」というのが相場だろう。しかし、原作を読めば、フランケンシュタインというのはモンスターの名前ではないし、このモンスターはとても賢く、人間以上に人間的なのだということもわかるはず。これを機会に、ぜひ、原作を読んでみてほしい。メアリー・シェリー、18 歳のときの作品。

2.『どろろ』１・２・３巻
手塚治虫／著　秋田文庫　1994

◆手塚治虫の作品はほぼすべて読んでいるのだが、あまり好きではなくて、２度読もうという気になれない……のだが、唯一の例外がこれ。体のあらゆる部分を魔神に盗まれてしまった百鬼丸が、その魔神をひとつひとつ倒していって、自分を取りもどす物語。それを邪魔しながら助けるどろろ。これは何度も読んだなあ。

3.『ペット・セマタリー』上・下巻
スティーヴン・キング／著　深町真理子／訳
文春文庫　1989

◆W・W・ジェイコブズの名作短編「猿の手」の発想をそのままもらってきた作品。息子を生き返らすなんて、もろ、そのままじゃん！　ところがこれは、長い。そのうえ、現代のアメリカが舞台で、いたるところの描写が異様にリアル。それに、怖いだけじゃなくて、切ない。キングの名作でしょう。

4.『小さな手』（『猿の手』所収）
金原瑞人／編訳　岩波少年文庫　2022

◆というわけで、ジェイコブズの「猿の手」、この短編集に入ってます。岩波少年文庫の「ホラー短編集」シリーズ、『八月の暑さのなかで』、『南からきた男』に続く３冊目。ぼくとしてはカポーティの「ミリアム」がお気に入り。あと、アーサー・キラ・クーチの「小さな手」はアンチ・ホラーの傑作。

選者コメント

5.『ミッキー７』
エドワード・アシュトン／著　大谷真弓／訳
ハヤカワ文庫　2023

◆主人公は「使い捨て人間」。危険な任務を押しつけられて、死んだら、「バイオプリントでつくった体に人格のバック・データを」埋め込んで再生させて、また使われる。ところが、てっきり死んだと思われて、ミッキー７の次の８が作られるんだけど、どっこい、７が生きていた！　どうする？　ボン・ジュノ監督で映画化が決定。なんと、そのタイトルは『ミッキー17』！

選者：東雅夫氏
(アンソロジスト・文芸評論家)

選者
コメント

「再生」という言葉は、さまざまな連想を誘うが、ここでは私のホラー原体験とも微妙に重なりあう本を、思いつくままに上げてみた。

1．『勝五郎再生記聞』
『仙境異聞・勝五郎再生記聞』所収
平田篤胤／著　岩波文庫　2000

◆近世国学の大立者のひとり篤胤は、正統的な国学者が見向きもしないような特殊な事象……なかでも、「転生」や「神隠し」といったオカルト事件に、旺盛で執拗な好奇心を燃やしたことで知られている。生まれ変わりの神秘を体現する勝五郎少年をめぐる本書は、その代表作といってよい。

2．『のんのんばあとオレ』
水木しげる／著　ちくま文庫　1990

◆篤胤は後世、多くの作家に影響を与えることになるが、とりわけ顕著な一人が、妖怪漫画の偉大な開祖・水木しげるへの影響である。水木の妖怪体験の原点が、「のんのんばあ」と呼ばれる拝み屋の老婆との親交にあったことは名高いが、その根幹には篤胤／勝五郎を思わせる「再生神話」体験があったことは、見逃すことができない。

3．『カばか』
『怪談』所収
ラフカディオ・ハーン／作　平井呈一／訳　岩波文庫　2010

◆ハーンこと小泉八雲もまた「生まれ変わり」の神秘に関心を寄せた一人だった。名著『怪談』収録作のなかでは比較的マイナーな本篇は、八雲本人による怪談実話といっても過言ではない、珍しい作品である。

4．『再生』
『眼球綺譚』所収
綾辻行人／著　角川文庫　2009

◆当代におけるホラーの代表的作家の一人である作者にも、一読なんとも居心地の良くない、本篇のような異色作がある。この不可思議な女性は、作者にとっての「アルターエゴ」でもあるのだろうか。

5．『盆の国』
スケラッコ／著　リイド社　2016

◆最後に、愛読するスケラッコさんの漫画作品を挙げておこう。「毎日がお盆だったら……」という少年の切なる願いが、思いがけない形で実現してしまった、奇妙な世界。お盆という風習にまつわる日本人の記憶、その淵源へと静かに想到させる、傑作である。

リストのタイトル
１０冊は、田原市図書館で
所蔵しています。

2023.10 作成